

平成 25 年 9 月 19 日

2013 奈良県立医科大学 和歌山県立医科大学
学生災害ボランティアバス 復興支援活動
活動報告

ボランティアバス参加学生

1 活動の概要

奈良県立医科大学の学生 11 名は、和歌山県立医科大学の学生 10 名とともに、平成 25 年 8 月 20 日（火）から 8 月 25 日（日）の間、福島県内でボランティア活動などを行った。南相馬市鹿島区の仮設住宅や、広野町にある高野病院および特別養護老人ホーム花ぶさ苑においてボランティア活動を実施し、現地の人と交流するとともに、南相馬市小高区、相馬市松川浦、いわき市小名浜などの津波被災地区を視察した。また、福島県立医科大学では災害医療セミナーを受講、南相馬市立総合病院では副院長及川先生より講話を受けた。

ボランティアバス初参加の学生は、「自分の目で見て、直に肌で感じたことの衝撃は強く、自分の意識がこれまでと変わっていったことを感じた。そして、被災地の多くの方がおっしゃっていたが、今回経験したことを自分だけで終わらせるのではなく、周りの人に伝えていくことの責任も強く感じた。」と話した。また、初めて被災地に入り震災から 2 年 5 ヶ月経過しても今なお復旧がままならない現地の様子を目の当たりにして、被災地に対するこれまでのイメージが大きく変化している様子であった。

2 主な日程

20 日（火）	夕刻、奈良・大阪を出発（車中泊）
21 日（水）	学生向け福島災害医療セミナー（福島県立医科大学）
22 日（木）	学生向け福島災害医療セミナー（福島県立医科大学）
23 日（金）	仮設サロンでボランティア活動（南相馬市鹿島区） 被災地の視察（南相馬市小高区） 南相馬市立総合病院 副院長 及川友好先生による講話 被災地の視察（相馬市松川浦）
24 日（土）	高野病院および特別養護老人ホーム花ぶさ苑でのボランティア活動 被災地の視察（いわき市小名浜、いわき市観光物産センター） 福島を出発（車中泊）
25 日（日）	早朝、大阪・奈良に帰着

3 参加学生

奈良県立医科大学 11 名（医学科 9 名、看護学科 2 名）
和歌山県立医科大学 10 名（医学科 9 名、看護学科 1 名）



23 日午前、南相馬市生活復興
ボランティアセンターにて

4 第3回学生向け福島災害医療セミナーへの参加

福島県立医科大学において8月21日（水）、22日（木）の2日間開催された第3回学生向け福島災害医療セミナーに参加し、災害医療、放射線、福島の震災、食品検査、内部被ばく検査、甲状腺検査、避難者のメンタルヘルスなどの講義を受け、トリアージ、放射線測定、エマルゴ・局地災害現場活動、リスクコミュニケーション（よろず相談）の実習・演習を行った。

セミナーには奈良医大、和歌山医大、福島医大の学生だけでなく、浜松医科大、佐賀大、熊本大、自治医科大、聖路加看護大、東京医薬専門学校の学生も参加しており、他大学の学生との交流も深めた。

参加学生は、「災害医療の現場では様々な協力が必要であり、それがいかに越えなければならない問題をかかえているのかも学ぶことができた。」「実際にガイガーカウンターを使うのは初めてだったので、良い経験になった。体表面のスクリーニングがこんなに難しいものとは知らなかった。」と、災害医療や放射線に関する知識・技術を学び、その必要性を感じていた。放射線実習では実際に福島医大の敷地内で放射線を測定した。

針がふれるのを見て「ここは被災地なんだな」と改めて実感した学生や、「正しい情報を提供して相談者の悩みを解消することは難しいことかもしれないが、真剣に相談者の悩みを傾聴し、慎重に自分の意見をのべることも相談者の悩みの解消につながるのだと学んだ。」「リスクコミュニケーションの演習においても知識を背景に相手と話すことが重要で、その知識が曖昧では相手に逆に不安にさせてしまう。」と感じた学生もいた。



福島医大の敷地内で
放射線測定実習



別室でリスクコミュニケーションに挑戦
する1年生と様子を見守る参加学生

5 南相馬市鹿島区での仮設サロンへの参加

南相馬市社会福祉協議会の生活復興ボランティアセンターが鹿島区の仮設住宅で行っている仮設サロンに、3グループに分かれて参加した。仮設サロンでは、血圧測定、傾聴活動を行い、学生の出し物として奈良・和歌山クイズを出題し、和歌山の土産と熱中症予防の注意喚起を兼ねて梅干を贈った。女子学生は事前にネイルアートの準備を行い、避難住民の方にネイルアートを体験してもらった。

今回の仮設サロンでは、昨年のサロン参加者と再会できた学生が互いに再会を喜んでいて、ボランティアバスの活動を継続する意義を感じた場面であった。

「初めて仮設住宅へ行くことに、不安と緊張があったものの、1年生の元気を武器としてサロンを盛り上げることができた。楽しんで話せた一方、被災されたときの話や避難しているときの話、現在の問題点などを聞かせて頂いたのがとても貴重な経験となった。」という感想や、「ボランティアの準備をしているときに一人の高齢者がいらっしゃって、開口一番『もうすっかり忘れ去られていると思ってたわ。』『被災者である自分たちの話を聞くよりも、被災地を直接目で見てほしい。とても若い君たちの心に刻み、たくさんの人に話して伝えてほしい。』と言われた。」と、避難住民の想いに触れることのできた学生もいた。



仮設サロンで避難住民の方に
耳を傾ける看護学生

「一昨年に比べて津波や避難についての話は少なかったが、相変わらず放射能に対する不安は目立ち、一時帰宅時の苦労話なども散見された。」と2年前との相違を感じ取っていた学生もいた。

6 南相馬市小高区の視察

南相馬市小高区では、NPOのボランティア活動支援センターと、防潮堤が決壊し、がれきが多く放置されたままの海岸を視察した。小高区は福島第一原発の20km圏内に位置し、放射性物質の管理規則上、汚染された物品・がれきの持ち出しが制限されていることもあり、復旧が大幅に遅れている地域である。

ボランティア活動支援センターを視察し、「生々しい泥の臭いを感じて、まだまだすべきことがあり、自分達以上に復興に必死になっているボランティアの方たちがいることを知った。」という感想のように、原発被害の最前線で医療系以外の分野でも汗を流して被災地に貢献している人たちの存在を感じていた。

「20km圏内の様子を見る前はガレキなどはだいたいきれいになっているのだろうとおもっていたが、現実は全く違っていた。」と感じる学生もいて、これまでの想像していた被災地の状況と小高区の復旧が遅々として進まない現状との差異を認識する機会となった。



草刈り機など器材が並んでいる
ボランティア活動支援センター



福島第一原発20km圏内で復旧が
進んでいない南相馬市小高区

7 南相馬市立総合病院での講話を受講

福島第一原発から23km離れている南相馬市立総合病院（南相馬市原町区）では、同病院副院長の及川友好先生より、被災当時の状況を中心に講話を受けた。講話の主な内容を被災時のこととした理由は、参加学生のほとんどが南相馬市への訪問が初めてだったためである。

「被災地の病院の実際の話聞いたのは初めてで、答えのない選択をせまられ、もし自分がその病院内の医師だったとしたらと考えると、とっさに出る答えは『病院に残って患者の治療を続ける』だが、自分が家庭を築いていたと仮定すると、とたんに答えがわからなくなった。」「どこの病院でも寝たきりの人を避難させることができなかつたと初めて知り驚いた。」等、原発事故被災時の医療活動の難しさについて考えさせられた。

また、2年前に同病院院長の金澤幸夫先生から講話を受けた経験のある学生は、「以前に比べて“事後的”観点から語られており、以前に聞いた時より少しだけ“答え”（ある訳ではないが）みたいなものが自分の内に芽生えてきた。」と、当時の体験が整理されつつあることを感じ取っていた。

同病院からは、「震災アーカイブス あの日から1年間の取り組みの記録」と題された医療活動の記録冊子と、地元相馬の日本手拭いをいただいた。

8 相馬市松川浦の視察

津波で大きな被害を受けた相馬市松川浦とその近くの漁港を視察し、復興に向けた現地の状況と、当時の津波の高さなどを確認した。復興に向けて新しい建物の建設が始まり、防波堤の修復工事も始まっていて、1年前に訪れた時との状況の変化が見てとれた。満潮時刻とも重なり、潮位と県道の路面との高さがほとんど変わらない様子を見て、地盤沈下により復興が妨げられていることを実感していた。



復興に向けてようやく動き出した相馬市松川浦漁港

9 高野病院および特別養護老人ホーム花ぶさ苑でのボランティア活動

内科、精神科の病棟をもつ高野病院と、隣接する特別養護老人ホーム花ぶさ苑で4グループに分かれて、ボランティア活動を行った。高野病院は、原発20km圏の少し外側にある認知症の患者を多く受け入れている病院で、震災直後の福島第一原発での爆発事故の際には、避難指示が出されたなかで病院にとどまり医療活動を継続した病院である。

方言が聞き取りにくいだけでなく、認知症の患者さんとの接し方も十分には理解していなかった学生も多かったので、活動の当初はコミュニケーションをとることに苦労していた。しかし、参加学生ひとりひとりが精一杯患者さんの話に耳を傾けることで、患者さんと心を通わせることが出来た。患者さんに「また来てね」と声をかけられた学生もいて、バスで病院を出発する際には病棟の窓から手を振って見送りをしてくれた。

事務長の高野己保さんは、病院のブログで「ナースがやきもちを焼いちゃうくらい患者さん達が大喜び、日頃あまりお話をしない患者さんも学生さんたちの手を離さず一生懸命お話をされている姿にナースたちも感動しておりました。外部からの適度な刺激も必要なんですね。」とコメントされていた。

参加学生からは「高野病院に入院している患者さんはその地域の方が多く、地域との密着性が高いことが信頼関係を生み、良い効果を生み出していたのかもしれない。」と、病院、患者さん、住民が相互に支え合うことで、被災地域で医療従事者が不足する状況でも地域医療がなんとか成り立っていることを感じ取っていた。

10 協力等

奈良県立医科大学、和歌山県立医科大学

福島県立医科大学（災害医療総合学習センター、Fukushima Will）、福島県青少年会館

南相馬市立総合病院、南相馬市社会福祉協議会生活復興ボランティアセンター

医療法人 社団養高会 高野病院、社会福祉法人 養高会 特別養護老人ホーム 花ぶさ苑

榊農協観光奈良支店、奈良観光バス(株)、NPO法人 わかやまNPOセンター